

幸は8%、日本ルナは16%それぞれ伸ばしたが、マリンフーズの伸び悩みとロルフチーズが10%ダウンしたことが収益に影響した。

今年も、メーカーへの変革をテーマに、各社とも製造と販売・開発で連携を図りながら営業力をつけながら、顧客視点で商品開発を進めたい。とくにマリンフーズは自社製造比率が10%にとどまっており、メーカーとして伸ばしていく計画で、宝幸ではロルフ大和工

場に隣接して新大和工場が9月に竣工、併設の冷食工場は茨城県筑西市に10月移転する予定で、この間に100億円の投資を行っており、スムーズな立ち上げを目指したい。このほかマリンフーズではグループ化した鉏路丸水を活用し、北海道フェアの実施などでテコ入れを図り、パニラヨーグルトやCVS向けのPBが好調な日本ルナは、引き続きマーケティング・商品開発をしっかりと行っていきたい。

○ TOKYO Xアソシエーション総会、14年度生産は7,448頭、東京五輪に向け増産

東京のブランド豚「TOKYO X」の流通関係者で組織するTOKYO Xアソシエーション(植村光一郎会長)は11日、東京・八王子市内で15年度定時総会を開き、14年度事業報告および15年度事業計画などを原案どおり承認した。役員改選では、糸瀬好弘副会長(三越伊勢丹フードサービス取締役製造部長)の後任に、道下泰治氏(同外販統括部加工食品事業部長)が就任した。15年度は、▽共同生産出荷に関する協議▽流通・販売等の検討会▽枝肉目合わせ会▽トレーサビリティ検討委員会▽TOKYO Xを通じた食育事業参加▽アグリネイチャー事業の参加▽東京オリンピック対策協議委員会——などを実施する。またTOKYO Xの定義に関する規約が設けられ、内臓に関しても(株)アグリスワン(埼玉・和光市)でと畜処理され、他の臓肉と厳格に識別できるものに関しては「TOKYO X」と銘柄をうたえるようになった。

総会開催に当たって植村会長は、「14年度のTOKYO Xの生産頭数は7,448頭、生産農家は26件となった。一般豚の生産頭数が減少するなかでTOKYO Xも頭数減少となり、認定店の方には出荷制限などをお願いすることが3度ほどあり、それについてお詫び申し上げます。昨年は15周年を迎えて、今年度は飼料米を始めて2年目、東京オリンピックに向けた活動の2年目に入っている。飼料米に関しては、指定飼料に15%添加したことで、オレイン酸の含有が多く、脂肪の融点が低く、粘りと甘みが出たという評価を消費者の方々から頂いている。東京オリンピックに向けてはより消費者目線で物事を考え、グローバルな交流も活性化してゆく。欧州の養豚産業をみると、生産工程の優位性を非常に強く強調して消費者にアピールしており、TOKYO X

も生産工程の優位性について情報発信を活性化してゆきたい。今後もTOKYO X誕生20周年、東京オリンピック・パラリンピックに向けてまい進してゆきたい」と述べた。

また、来賓あいさつとして、同ブランドの系統「トウキョウX」を配布している東京農林水産振興財団の高木章雄事業課長は「TPP交渉は佳境に入っているが、『TOKYO X』は美味しい豚を目指しており、国際競争に打ち勝つ豚肉としての先駆けであると自負している。青梅庁舎でPEDが2月中旬に発生したが、現在の状況は落ち着いている。原種豚がへい死している状況にあるが、維持群はPEDの影響を受けていないため、安心していただきたい。原種豚をつくる公的機関として慎重に清浄化を進め、配布再開に向けて努力している」と理解を求めた。その上で「庁舎(青梅畜産センター)は昭和50年代につくられ老朽化が進んでいるが、現在、再編整備が進められおり、オリンピックの前年である19年には完成する計画だ。青梅庁舎は全体で25haあり、うち豚肉飼育施設は床面積で約2,800㎡となっている。これを4千㎡に拡大し、現在、雄25頭・雌50頭の原種豚の維持群の増産に向けて施設増築や最新型の設備に変更してゆく計画にある。東京オリンピック・パラリンピックに向けて、TOKYO Xがさらに発展できるよう努力してゆきたい」と述べた。このほか総会では、東日本大震災以降も減少することなくTOKYO Xの生産に取り組んでいる宮城県の星昌宏さん、星恵美さん、山田多賀男さんに感謝状が贈られた。また総会後は「東京オリンピック・パラリンピックとTOKYO Xブランド戦略」と題して植村会長と消費者団体「くらし探検クラブ」の廣田美子代表による記念対談が行われた。